

第26回西日本事例発表オンライン研修会 発表概要シート

法人名	スミリンケアライフ株式会社	施設名	エレガーノ甲南
発表タイトル	認知症フロアにおけるダイニングの安全な空間作り ～KYT(危険予知トレーニング)の導入と危険箇所のマップ化の試み～		
研究の目的	私達のフロアは認知症に特化したフロアであり、入居者が日中の大半を過ごすのはダイニングである。そのダイニングが雑然としていたため、注意して見るとハード面にいくつかの問題を抱えていた。なぜ安全な空間が維持できないのかを考えた際、スタッフの危険予測に対する意識の不十分さが考えられる。また、広いダイニングだが、片付ける箇所や清掃の仕方が決まっていないことも要因と考えられる。 私達、認知症フロアでの PEAP を用いた先行研究では、入居者がリラックスして過ごせる空間作りや環境作りへのアプローチが主なテーマであった為、安全で自由な空間作りに関しては深く研究されてこなかった。 本研究ではダイニングの空間に焦点をあて、KYTを学び、実践を行うことで、スタッフの危険予測に関する意識が高まる。また、危険箇所を可視化し共有することで入居者は安全に過ごすことができる空間が作れることを研究の目的とした。		
発表の概要	KYT 研修を受ける前と後での意識の変化があるのかアンケートを用いて意識調査をし、得られたデータから意識変容がみられたのかどうか調べた。また、同時に KYT 研修を受けた後にスタッフには KYT の技法を用いて個人で危険と感ずる箇所等をピックアップ、危険予測、改善策を立ててもらう。グループワークを通じ共通認識として発信した。それらにどのような効果が見られたのかを考察した。		
研究方法	当施設3階フロアの介護スタッフ14名、看護師3名の計17名を対象に、まず経験年数などの基本情報、日々の業務の中で危険について意識しているか等を質問する「KYT 研修実施前意識調査のアンケート」を実施した。そして外部講師の KYT の研修を受講し、KYT 研修を受けて危険予測に対する意識に変化があったか、そう感じた理由等の「KYT 研修実施後意識調査のアンケート」を実施した。このアンケート用紙と併せて、ダイニング内の危険箇所を記入してもらう「危険箇所記入シート」を対象者全員に記入してもらい、シートを用いた勉強会「KYT ミニカンファレンス」を実施した。ミニカンファレンスから得た意見を用いて「危険予測マップ」を製作した。		
成果・結果	研修実施前アンケートでは①「日々の業務の中でフロアの危険性について意識しているか」については「とても意識している」3名、「意識している」11名、「どちらでもない」が3名だった。 ②「KYT について知っているか」については「知っている」5名、「知っているが詳しくは知らない」6名、「知らない」が4名だった。①と②の質問の回答をクロス集計した結果、意識して働いている14名のうち、4人は KYT をよく知らないが危険予測をしながら働いていることが分かった。 研修受講後のアンケートでは「KYT 研修を受けて、危険予測に意識の変化があったか」については「変化があった」14名、「受講前と変わらない」2名だった。KYT 研修の感想とその他自由記述にも多くの回答が得られた。 危険箇所記入シートは合わせて39事例の記入があった。また、危険箇所記入シートであげてもらった項目のうち改善策が未回答であった事例を題材にしてミニカンファレンスを開催し、個人で考えてもらった後にグループワークを行った。 マップ作成では39事例の中でも多く挙げられた5事例に絞りマップ化に適用した。マップはビフォーアフターが分かるように可視化した。		

考察	スタッフの危険予測に対する意識の変化、マップ作成過程での気づき、KYT の定着にむけての3つに分けて考察した。まず、危険予測に対する変化では変化があったと答えたスタッフがほとんどであったが、3階のスタッフは5年以上の経験があるスタッフがほとんどで、意識の変化も、元から危険予測に対して意識していたが、「再認識できた」「経験からの思い込みがあった」等の気づきが見られた。更に一つの事象についてグループワークをすることで、各々が新しい視点でも見る事が出来るようになり、良い効果が見られた。マップ作成過程では、まず危険箇所記入シートの集計時、ダイニングに絞ったにも関わらず、39事例もあがった様に、事故がおきていないだけで危険箇所は多数存在していることが分かった。また、マップ作成時では写真を用いて説明することで可視化でき、さらに情報共有だけでなく新たな危険箇所の発見にも繋がるのではと考えられる。しかし、本研究では作成まではできたが実践に移すまでは研究できなかったことが課題として残った。上記を踏まえて、フロアで KYT が定着していく為にはスタッフがそれぞれ危険予測をし、カンファレンスを重ねることで業務の一環として習慣化し、定着に繋がると考えられる。フロアの目標に設定し、これらが安全に生活できる空間作りに繋がっていくと考えられる。
アピールポイント 伝えたいこと	今までにも認知症フロアとして、PEAP を用いた研究、ユマニチュードを根付かせるための研究など、認知症ケアの質の向上を図る研究が取り組まれてきた。より、専門的な研究を進めていく案もあったが、基礎的な事へ焦点を当てることでみえるものもあるのではないと考え研究に至った。 本研究では KYT を用いて改めて危険予測について考察することで、「長年の経験」がメリットのにもデメリットにもなり得ることが分かった。 この結果は培った技術を向上させるには、基礎に立ち返り、再認識する過程も必要であると研究を通して3階スタッフにも感じてもらったことが大きな成果となった。